

# 天うつ浪

第二

幸田露伴

明治四十年一月 春陽堂



## 其二十三

よしや大吉ならぬまでもせめては凶ならぬ御籤を得て、憂に沈み悲に陥れる氣を引立て、信心の勇を附けて呉れんと爲たるらしき親切の老人が、思ふこと違ひて甚く望を失へるは、忽ち先づ其の色に現れて、僧より受取りし御籤をば、力無げに輪に巻きながら、鈍るゝ此方へ歩み來れるに、水野は見ずして既に其の文の凶なるを知れり。

第何十何番大吉といふならば、如何ばかりか悦び勇んで示すべきを、老人は巻きたるまゝ御籤を水野の懷中に軽く押入れて、

『何様か吉凶にかゝはらず御信心なさい。大吉でも驕れば凶に反ります、たとへ凶でも御信心を強くなすつて、それからまた改めて御籤を御戴きなすつてごらんさい、吉になりますこともございますものです。吉につけ凶につけ御信心が大切です。決して信を御冷しなすつてはいけません。さてそろゝもう下向いたしましやう。』

と、云いはひ終はつて本尊ほんぞんをまた一拜いっぱいして、おのれ先まづ御堂みだうを去さらんとしたり。

老人らうじんが様子やうすの急きふにそはつけるは、何なんの意いも無なかりし我われに智ち慧ゑをつけて御籤みくじを取とらせたるに、その御籤みくじのことのほか凶あしかりしかば、却かへつて其そのために憂うれひを増まし、悲かなしみを添そふることもやと、氣きの毒どくさに堪たへかねて傍かたへに居ゐづらく狭せまくして正直しやうちきなる心こころの憫あはれにも落着おちつきかぬるが爲ためなるべし。平生ひごろの我われを知らずして、たゞ自己おのが身みにのみ比較ひきくらぶれば、然まる心遣こころづかひをするも無理むりならねど、御佛みほとけの廣大くわうだいなる御誓願おんちかひをこそ頼たのみ奉たてまつりつれ、御鬬みくじといふ事は御經ごきやうにも見みえず、賣僧まいそうの仕出しだしたるなるべき春はるの遊戯あそびの寶引はうびきといふにも似にたる埒らち無く據よりどころ無なき御籤みくじの文ぶんなどに、我われいかに心こころを動うごかされんや。それとも知らずして性質ひとの好きよき老人らうじんの、心こころを遣つかふ笑止せうしさ、と水野みづのは却かへつて老人らうじんを憐あはれみ、わざと懷中くわいちゆうの御籤みくじを其儘そのまにして讀よまず。共に石路せきろの長々ながくしきを下向げかうしけるが、老人らうじんは懷中ふところより折をり本ほんになりたる普門品ふもんひんの小きを取り出いだして、

『だいなしになつて居をりまする物ものを、呈あげると申まをしては失禮しつれいですけれど、

まあ如か是しはいふ物ものの事ことですから御免ごめん下さい。これを貴君あなたに差上さしあげますから、何様どうか御取おとりなすつて下さいまし。私はもう無書そらで記おぼえましたから、此書これは用ようが明あいたのでございますが、何様どうか貴君あなたも御拜おがみなさるたびに、これを御覧ごらんになりながら御經おきやうを御あげなすつて下されば、私わたしは大變たいへんに嬉うれしいと思おもふのでございます。それに此この末すゑの方に私わたしの名住なとこ所ろが小ちひさく書かいてございますから、何ぞの御序おついででも御有おありでしたら御立寄たちより下くださいまし、いろ／＼御利生ごりしやうの御話おはなしやなんぞを致いたしましてやうから。ではまた明日御目みやうにちおもにかゝりましてやう。どうか撓たゆまずに御信心ごしんなすつて!。』

と云いひたき事ことのみを云いひて終つひに別わかれたり。  
冊子ぼんは言ことばを費つひやして辭いなむべきほどのものにもあらず、特ことに快こゝろよく受うけ納をさめて芳志こうざしを無むにせざらんは、差さし當あたつての道みちなるべしと、水野みづのは老人ろうじんに厚意かういを謝しやして、袖そでを分わかつて東方ひがしへ去さりつ、先づ普門品ふもんほんを懷中ふとこに入るゝに、巻まきたる彼かの御籤みくじのかさ／＼と手てに觸ふれたれば、引交ひきちがへて取り出いだして其文そのぶんを讀よむに、

第	七	番	凶
登 <sup>ふねにのぼりて</sup> レ舟 <sup>二</sup> 待 <sup>びんぶうをまてば</sup> 二便 <sup>一</sup> 風 <sup>一</sup> 。	月 <sup>げつ</sup> 色 <sup>しよく</sup> 暗 <sup>くらくしてもう</sup> 朦 <sup>ろう</sup> 朧 <sup>。</sup> 。	欲 <sup>かうりんをましらしてさらんとほつすれば</sup> 下 <sup>二</sup> 輾 <sup>二</sup> 香 <sup>一</sup> 輪 <sup>一</sup> 去 <sup>上</sup> 。	高 <sup>かう</sup> 山 <sup>さん</sup> 千 <sup>せん</sup> 萬 <sup>ばん</sup> 里 <sup>りなり</sup> 。
舟にのりて行かんとす ればおひてが無い	月もくらきぞ 見れば空もわるくして	車にのりておもふところ へゆかんとすれば	つゞける山々恐ろしく 高くしてそれも叶はぬ

とありて、ひしくと我が身の上<sup>うへ</sup>に巧<sup>よ</sup>く中<sup>あた</sup>りたり。

もとより取るに足らぬこと、は思<sup>おも</sup>ひながらも、不思議<sup>ふしぎ</sup>に中<sup>あた</sup>れる此<sup>こ</sup>の文<sup>ぶん</sup>の流<sup>さすが</sup>石<sup>が</sup>に胸<sup>むね</sup>に徹<sup>こた</sup>へて心<sup>こころ</sup>さびしく、じつと眼<sup>め</sup>を留<sup>と</sup>めて見<sup>み</sup>れば、末<sup>すえ</sup>の方に<sup>かた</sup>をんなもじをん<sup>をんなもじ</sup>なもじにて細<sup>こまか</sup>に注<sup>ちう</sup>し記<sup>しる</sup>せる其<sup>その</sup>最<sup>まつ</sup>先<sup>さき</sup>に、

女<sup>をんな</sup>文字<sup>なもじ</sup>にて細<sup>こまか</sup>に注<sup>ちう</sup>し記<sup>しる</sup>せる其<sup>その</sup>最<sup>まつ</sup>先<sup>さき</sup>に、  
病<sup>やまひごと</sup>事<sup>じう</sup>は十<sup>じう</sup>に六七本復<sup>ろくしちほんふく</sup>無<sup>な</sup>し、長<sup>なが</sup>びきたらば後<sup>のち</sup>は息災<sup>そくさい</sup>になる事<sup>こと</sup>もあるべし、よく信力<sup>しんりき</sup>をもて佛神<sup>ぶつしん</sup>を頼<sup>たの</sup>みて吉<sup>よし</sup>、

とありたるは、いよく何<sup>なに</sup>となく不<sup>ふ</sup>快<sup>くわい</sup>を感じ<sup>かん</sup>て、腹<sup>はら</sup>の底<sup>そこ</sup>より寒<sup>さむ</sup>さの上<sup>さむさのぼ</sup>り  
來<sup>きた</sup>るやうにおぼえたり。

何<sup>なに</sup>とか思<sup>おも</sup>ひけん水<sup>みづ</sup>野<sup>の</sup>は引返<sup>ひつかへ</sup>して、復<sup>また</sup>相<sup>さがら</sup>良<sup>ら</sup>を訪<sup>と</sup>ひぬ。待<sup>ま</sup>つ事<sup>こと</sup>一<sup>いち</sup>時<sup>じ</sup>餘<sup>あま</sup>りに  
して終<sup>つひ</sup>に相<sup>さがら</sup>良<sup>ら</sup>に親<sup>した</sup>しく會<sup>あ</sup>ひ得<sup>い</sup>て、必<sup>かな</sup>ず見<sup>み</sup>舞<sup>ま</sup>はんとの辭<sup>ことば</sup>を得<sup>い</sup>て歸<sup>かへ</sup>りしが、  
幸<sup>さいはひ</sup>にして今<sup>けふ</sup>日は休<sup>やす</sup>校<sup>み</sup>の日<sup>ひ</sup>なればこそ宣<sup>よ</sup>けれ、吾<sup>あづま</sup>妻<sup>ま</sup>橋<sup>はし</sup>にかゝれる時<sup>とき</sup>は既<sup>すで</sup>  
に九<sup>く</sup>時<sup>じ</sup>に近<sup>ちか</sup>からんとしてたり。